

佐守政方、菅沼主膳正、正定伊丹三郎右衛門直賢、大島雲平以興、大久保源次郎忠喬をはじめ、和漢の才人、各御庭の池邊に座を設け、觴を流し、各詩歌を賦す。信遍は別の仰事をうけて、この座に列し、七言の古體をつくりて奉る。ことばは、みな御前に召て、祿多く賜はり、各歡をつくして退きぬ。けふの序は浦上彌五左衛門直方戸小納書て奉る。信遍はさらにかなの記をかきて進らせた。その草稿は今も家に存せり。

〔文恭院殿御實紀七十三〕天保八年三月朔日、上巳の御祝として、日光准后、三家のかたぐい使してものまいらせらる。三日、上巳の御祝規のごとし。

〔執政所抄上三〕三日御節供事

御節供 殿下御料朱器 目如元日 色 件御料節供、家司所課如常也。但藏人所御隨身所饗等近代絶了、无

人被改行之歟。北政所御料栗柄野様器 目同前如元日 色 件御節供、北政所家司所課如常、但女房御料衝重

廿前所被調副也、而近代年成勤、或不勤事、參差也。已上兩方陪膳役送如常。

〔萬葉集十九〕三日○天平勝寶守中越 大伴宿禰家持之館宴歌三首○二首略

漢人毛、棧浮而遊云、今日曾和我勢故、花纒世余。

〔日本紀略十一條〕寛弘四年三月三日、庚子、今日左大臣藤原道長於上東門第設曲水宴、題云、因流泛酒、

〔法成寺攝政記〕寛弘四年三月三日、庚子、有曲水會、東渡所板流東西、立章整硯臺等、東對南唐廂、上達

部殿上人座、南於下廊、文人座、辰時許大雨下、水邊撤座之後、風雨烈、廊下座雨入、仍對内儲座間、上達

部被來就座、新中納言、式部大輔兩人出、詩題、式部大輔出、因流泛酒用之、申時許天氣晴、水邊立座下

土居、羽觴頻流、移唐家儀、衆感懷、入夜昇上、右衛門督、左衛門督、源中納言、新中納言、勘解由長官、左右

弁、式部大輔、源三位、殿上地下、文人廿二人、四日辛丑、文成就、流邊清書、立流下、立廻草整、講詩、池南

廊樂所、數曲有聲、昨日舞人著直衣、今朝位袍、講書了間、被物納言、直指貫宰相、直殿上人、或絹褂、或白